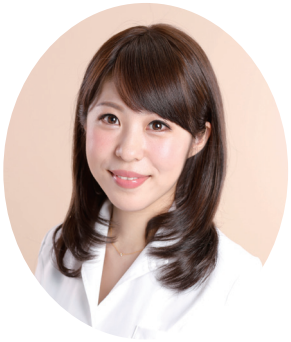
連載

リオルダンクリニック通信

⑫あなたはどんな患者さんですか？私がなりたい医者像は？



増田陽子
BFL クリニック 医師

今回は少しいつもと毛色を変えて、リオルダンクリニックで出会った印象的な患者さんや自分が日本以外で出会った先生方の話も交えて、私の尊敬する理想の患者像、医師像についてお話ししたいと思います。

リオルダンクリニックの8つの信条

リオルダンクリニックには8つのとても美しい信条があり（**図1**）、その一番初めが“Empowering ourselves as co-learner”です。

“Empower”の意味を辞書で引いてみると、「権限を与える、力を与える」となり動詞の末尾に“-ing”がついているので名詞になります。“ourselves”は「私たち自身」、“co-learner”の“co”は「共同、共通」、“learner”は「学ぶ人」なので、直訳すると「私たち自身に共同学習者として力を与えること」になります。

ここで「私たち自身」が誰を指すのかですが、日本人的な感覚だとクリニックの信条なのだからそのスタッフを指すと思いそうなものですが、リオルダンクリニックでは患者さんのことも医者のことも“co-learner”と言います。つまり“Ourselves”はスタッフだけではなく患者さんのことも指しており、患者さんも含めて「私たち」と表現しているのです。

医師と患者の関係

ここで私は、理想像というかあるべき姿としては、実は患者も医者もその境界や区別は大してなく、その患者さんが健康上の問題を解決するのをサポートするただのチームメイトなのだという、また医師や患者には特に上や下などの上下関係があるわけではなく「患者さんが主役なのだ」という、とても単純で言い古されたことがやっと腑に落ちた気がしました。

もちろん医師は医学部での医学教育を受け、その後の臨床経験を積んでおりますので、患者さんよりも範囲が広い知識を持っているかもしれません。ただ、いくら医師とはいえ、なんでも知っている完璧な人間のわけではもちろんありませんし、その患者さんに対してどれだけ有用な知識があるかというのは、ケースバイケースです。

治療がうまく行きやすいと思う患者さん

リオルダンクリニックで出会った患者さんの中には、その方自身に関係する領域について、医師を凌ぐほどの知識を持っている方もたくさんいらっしゃいました。

そして、何よりご自身で情報を集める努力をしている患者さんのほうが、もちろん一般的ではありますが、治療の結果がよかったと思います。その患者さんが知っている情報もそうですが、一番は患者さんが積極的に治療に関わっているかどうかが鍵になっていると思われます。

現代では、関連する本やYoutube、ウェブサイトなど、情報を得ようと思えばいくらでもできますし、フェイスブックのグループなどで同じ悩みを持つ患者さんと情報を共有したり、励ましあったりする

こともできます。

たとえば、リオルダンクリニックだけではなくスイスのクリニックの患者さんでも、中国やインド、アメリカなど世界各国から家族みんなで数週間滞在されていたり、リオルダンクリニックに来られる前には、ご自身で調べて「メキシコにがん治療に行ってきた」というような、本当にびっくりするような行動力の患者さんが多いと感じました。

生活習慣を変えるうえで、家族の理解が重要なことも皆さんよくわかっておられ、家族全員で受診される患者さんの多さも印象的でした。

リオルダンクリニック 8つの信条

1. 医療者も患者も共同学習者（Co-learner）であること
   Empowering ourselves as co-learners.
2. 測定できる機能異常を改善すること
   Correcting measurable dysfunctions.
3. 食事を薬とすること
   Making food our medicine.
4. より高い健康レベルを目指すこと
   Cultivating healthy reserves.
5. 病気の本当の原因を探し出すこと
   Finding the real causes of illness.
6. より良いライフスタイルを選択すること
   Adopting better lifestyle choices.
7. 病気ではなく人全体をケアすること
   Caring for the whole person.
8. 自然の癒しの力を信じること
   Honoring the healing power of nature.

図1

海外で出会った先生方

アメリカにいたとき、多くの先生方にお会いする機会をいただきましたが、優秀で実力がある先生ほど積極的で行動力がある先生が多いと感じました。

アメリカのいろいろな学会でもスイスのセミナーでも、アメリカ、ヨーロッパ全土はもちろん、中国、インド、タイや韓国、中東など文字通り世界中の先生方が、ご自身の診療でとてもお忙しいはずなのに、熱心に勉強にいらしていました。

また、私のような若輩の医師の疑問にも真摯に答えてくださいました。たとえば、患者さんから新しいデバイスや治療法を教えられたときは、オープンマインドで検討されていらっしゃることが何度もありました。特に、新しい検査などは患者さんのほうがよく知っていらっしゃることはよくあるのです。

そして、新しいサプリメントや点滴などを取り入れる際には、まずは医師が自ら試してみます。もちろん患者さんとは状態が違いますので、医師が試してみて結果が良かったからといって患者さんに同じ効果をもたらすとは言い切れませんが、治療を受けられる患者さんのお気持ちがわかったり、サプリメントの飲みにくさや生活習慣を変える難しさなどを医師が知ったりできることは、患者さんと治療の相談を行う際にとても役立ちます。

コロナウイルスの流行で明らかになったこと

そして若干話は逸れますが、新興感染症COVID-19の未曾有の流行で、医師の真価がまさに今問われているように感じてなりません。

既存の組織や治療、しがらみなどに囚われ、患者さんを助けるより自分の保身に徹する医師と、標準治療にないものでも効果があるのなら積極的に活用し、1人でも多くの患者さんを助けようと、自分の周りだけでなく世界で情報をシェアする医師がいます。

自分が憧れるのはもちろん後者ですが、いざ情報を発信するなど挑戦してみようと思ってもなかなかうまく行きません。自分のプライドを守ろうとする多くの医師が、必死になってあからさまに邪魔をしてくるのです。

同じ医療者として悪く言いたくありませんが、はじめは正直驚きました。世界中でどれだけの患者さんが犠牲になれば目を覚ますのか、本気で患者さんを救けたいという気になって可能性を探るようになるのか。

一方で、きっとそのような先生方のご家族が感染したとしても、今のまま保険診療という枠組みの中でしか診療できない先生もいるのだろうと思うと、虚しい気持ちになります。

ただどんなに妨害や誹謗中傷されたところで、自分にはあるべき姿を体現して示してくださる憧れの先生方が世界中にいらっしゃいます。その偉大な背中を一生懸命になって自分なりに追いかけることしかできませんが、切磋琢磨する仲間も、一緒に治療をがんばってくださる患者さんもいらっしゃるので、少なくとも孤独ではありません。

目標を見失わないように、ともに学ぶCo-learnerとして患者さんとご一緒により良い健康を日々追求するしかないと思っております。